

特集にあたって

シンポジウム担当 山 根 純 佳

国際ジェンダー学会 2018 年大会（2018 年 9 月 1 日，2 日）において，公開シンポジウム「男性学／男性性研究のゆくえ」を開催した。日本の男性学・男性性研究がジェンダー研究／フェミニズムとどのような関係を結んでいくのか，社会変革の担い手としての男性学／男性性研究にはどのような可能性があるのかをテーマに，多賀太氏（招待講演），澁谷知美氏，川口遼氏をパネリストに，海妻径子氏，大倉韻氏をコメンテーターに招き，刺激的な議論が交わされた。争点となったのは，当事者学としてはじまった男性学と男性性研究の関係，「男性もまた困っている」「男らしさのコスト」という経験の言語化と「構造的な男性支配」の説明の関係，男性間の差異やヒエラルキーと男性支配の構造とをいかに関連づけるのかといった点である。本号では，これらの論点をさらに追究すべく，シンポジウムの登壇者 3 名の論文による特集を企画した。以下，3 つの論文を紹介したい。

第一論文，多賀太氏の「男性学・男性性研究の視点と方法」は，男性学・男性性研究の視点として，男性もまたジェンダー化された存在であることを明らかにする「男性の脱標準化」，階層・人種・セクシュアリティ，身体的能力や学力による差異にもとづく「男性性の複数性への注目」，男性のあり方をめぐる権力関係や利害関係により意識的な「ジェンダーポリティクスへの視点」の 3 つをあげる。一方で，「男性の制度的特権」「男らしさのコスト」「男性内の差異と不平等」の 3 つの複眼的な視点を男性たちが置かれている多様な現実を目配りをするための道標として位置づけるこうした複眼的な視点は，たとえば，欧州委員会の報告書「ジェンダー平等における男性の役割—欧州の戦略と展望」においても，推奨されているとする。一方で「男らしさのコスト」を男性差別やその結果とみなす男性運動・男性学のアプローチについては，男性が女性に比べて不利な状況に置かれている側面のみを取り上げて強調し，それをジェンダー構造のよりマクロな文脈に関連づけて理解しようとしないと批判している。

第二論文の澁谷知美氏の「ここが信用できない日本の男性学」は，これまでの

日本の男性学の言説をひきながら、日本の男性学が論じてきた「男性の生きづらさ」とは男性支配のためのコスト・代償にすぎないと論ずる。澁谷氏によれば、男女の生きづらさを対称的なものとして論じる言説は、男女の権力関係を脱コンテクスト化し、「男性のほうが抑圧されている」という極端な言説に転化する可能性がある。また「コスト説」は、「権力を持つことにはコストがつきまとう。したがって、男性は権力を持っていない」というロジックのねじれを内包している。そのうえで澁谷氏は、男性学がすべきこととして、①身近な女性の自立を応援することの男性への推進、②「女性／相対的に弱い立場にある同性に加害をする男性」の分析、③稼得役割に固執する／の獲得に失敗した男性を「冷却する」言説の開発を提案する。

第三論文「親フェミニズム的に聴き取り、大衆的に運動する」と題した海妻論文は、英語圏における男性性批判研究 CSMM (Critical Studies on Men and Masculinities) が、親フェミニズムであることを学問としての自己規定に含め、男性研究者自身がジェンダー化された主体としての自らの立ち位置と向き合ってきたのに対し、日本の男性学／男性性研究が、当事者主義にとどまってきたとして、その背景について分析している。日本では男性が女性を研究対象にするのではなく、まずは男性自身を研究や意識改革の対象にせよという主張が、女性研究者・アクティビストの要求としてもあったこと、また他の男性の加害者性を糾弾する代行主義批判に対し、被害者性を感じる自分を含め自らを男性主体として引き受ける当事者主義に一定の説得力があったことがあげられる。

一方で海妻氏は、90年代の男性運動や男性学の社会实践が、男性間の差異や多様性を捨象して、「数多くの男性の実感に訴えることができる」男性大衆に向けた語り口をとってきたことが、オルタナティブな男性性の構築を後回しにしてきたと指摘する。日本の男性学・男性性研究に必要なのは、男性加害者、女性被害者という二項対立的視点ではなく、家父長制という構造に埋め込まれ、かつその構造を再生産しているエージェントとしての男性のあり方を前提にした研究のあり方だと指摘する。

女性学やフェミニズムの成果をとりこみつつ、「男性主体」の問題に依拠して発展してきた日本の男性学・男性性研究が、いかにしてフェミニズムに貢献していくのか。3論文はそれぞれ異なる処方箋を出しているが、男性変革に向けた実践の担い手としての男性学／男性性研究に大きな期待をかける。

一方で、男性の経験として語られる主観的現実と、男性が得ている構造的利益、また両者における男性間の差異・多様性を説明する作業は、男性学・男性性研究だけでなく、ジェンダー研究そのものの課題でもある。家族、職場、学校といった社会的空間において、特定のカテゴリー（地位・階級・エスニシティ）の男性・

女性それぞれが選択可能な実践の違いや、その構造的基盤を検証することこそ、家父長制の解明に不可欠な課題といえよう。その意味で、本学会でおこなわれているジェンダー研究は、男性問題の解明をその一部として含んでいるはずである。今後のジェンダー研究の展開にとっても男性学の知見との接続は、必要不可欠なものとなるだろう。

(やまね すみか 実践女子大学)